

「漢語の自他」に関する定量的研究

庵 功雄（一橋大学国際教育交流センター）[†]

A Quantitative Analysis of ‘Transitive/Intransitive Correspondence’ in Kango(Chinese-Origin Words)

Iori Isao (Hitotsubashi University)

要旨

「自他の対応」は初級日本語教育で必ず取り上げられるが、それは和語のみを対象としたものであり、「漢語の自他」についてはほとんど取り上げられていない。漢語の自他は形態からはわからないため、和語とは少し異なるアプローチが必要である。本発表では、漢語の自他を 1) 自動詞型、2) 他動詞型、3) 自他同形型に分け、さらに、A) 他動詞型と B) 非他動詞型と捉えた上で、BCCWJ を用いて A、B 両タイプについて頻度上位 100 語について調査を行い、その結果に基づいて、日本語学習者の学習負担をかなり減らすことができる提案を行った。

1. はじめに

初級日本語文法項目の中で日本語学習者（以下、学習者）にとって難しいものに「自他の対応」がある。

自他の対応とは、(1) (2) のように、統語的、意味的に対応関係が存在し、形態的にも類似性の高い自動詞と他動詞のペアが存在することである¹。

(1) ドアが閉まった。（閉まる：自動詞）

(2) 太郎がドアを閉めた。（閉める：他動詞）

こうした対応関係があるとき、典型的な例においては次のような関係が見られる。

(3) a. 自動詞は、出来事が自然発生的に起こるといった捉え方を表す

b. 他動詞は、動作主が出来事を引き起こしたといった捉え方を表す

c. 自動詞のガ格名詞句は無情物で、その深層格は他動詞のヲ格名詞句と同じく「対象」である

d. 他動詞は対象変化他動詞であり、他動詞（で表される出来事）が成り立つときは自動詞（で表される出来事）も成り立つ（逆は必ずしも成り立たない）²

自他の対応はこのような統語的、意味的特徴に加え、形態的対応関係がやや複雑であるため³、学習者にとって学習困難項目と認識されている。

このように、自他の対応は学習者が苦手とするものだが、初級で扱われるのは「和語」の場合であり、「漢語の自他」については現在の日本語教育ではほとんど扱われていない。し

[†] a041115y@r.hit-u.ac.jp

¹ 自動詞には、「走る、泳ぐ」のような意志的自動詞（非能格自動詞）と、「閉まる、死ぬ」のような非意志的自動詞（非対格自動詞）があるが、自他の対応があるのは後者に限られるため、本発表では特に断らない限り、自動詞を非意志的自動詞の意味で用いる。

² したがって例えば、「*太郎がドアを閉めたが、ドアは閉まらなかった」は非文となる。自他の対応の日本語学的解釈については庵（2012）参照。

³ 和語の自他の対応の様々な形態的パターンについては庵ほか（2000）参照。

かし、中川（2005）ほかで指摘されているように、学習者が論文などを書く際には「漢語の自他」を身につける必要がある。漢語の自他には和語の場合とは異なる困難点がある。本発表ではこの点に関連する定量的な調査結果と、それを踏まえた提案を行う⁴。

2. 漢語の自他に関する問題点

1 では、和語の場合の自他の対応について見たが、(4) (5) からわかるように、同様の関係は漢語の場合にも見られる。

(4) 太郎の夢が実現した。（実現する：自動詞）

(5) 太郎が夢を実現した。（実現する：他動詞）

自他の関係について、和語の場合は、自他同形はほとんどないため、形態的対応はやや複雑であるとしても、その対応がわかれば、自動詞であるか他動詞であるかは自明である。それに対して、漢語の場合は、動詞の形態は全て「VN する」（VN は動名詞⁵）（辞書の見出しは VN）で提示されるため、動詞の形態から自他を知ることは困難である。さらに、漢語の自他については、国語辞典の記述も一定していない。こうしたことから、「漢語の自他」は隠れた学習困難項目となっている可能性が高い⁶。

2.1 漢語の自他の3パターン

漢語の自他には次の3パターンがある。

(6) 自動詞型 a. A 国の経済が発展した。（自動詞）

b. *彼は A 国の経済を発展した。（他動詞）

(7) 他動詞型 a. *新しいスマートフォンが発売した。（自動詞）

b. B 社は新しいスマートフォンを発売した。（他動詞）

(8) 自他同形型 a. 論文が完成した。（自動詞）

b. 彼は論文を完成した。（他動詞）

「自動詞型」は「…が～する」（ガ格名詞句は無情物⁷）は適格で「…を～する」は不適格であるもの、「他動詞型」は「…を～する」は適格で「…が～する」は不適格であるもの、「自他同形型」は「…が～する」も「…を～する」も適格であるものである。

庵（2024a）で見たように、「自動詞型」「他動詞型」では空白部分を使役、受身が補い、次のような対立をなしている。

(6') a. A 国の経済が発展した。（自動詞） = (6a)

b. 彼は A 国の経済を発展させた。（他動詞 = 使役が補完）

(7') a. 新しいスマートフォンが発売された。（自動詞 = 受身が補完）

b. B 社は新しいスマートフォンを発売した。（他動詞） = (7b)

一方、定延（2000）が指摘するように、「…を～する」が適格な場合に、同様の意味で「…を～させる」も適格になる場合（使役余剰）がある。

(8') a. 論文が完成した。（自動詞） = (8a)

b. 彼は論文を完成した。（他動詞） = (8b)

c. 彼は論文を完成させた。（他動詞 = 使役余剰）

⁴ 本発表は、庵（2024b）の拡張修正版である。

⁵ サ変動詞の語幹を動名詞と呼ぶ（Cf. 張 2014）。

⁶ 漢語の自他が漢語を共有する中国語話者にとっても難しいことは中川（2005）の指摘を俟つまでもなく、学習者の論文などを添削している日本語教師は実感しているところだが、それが「隠れた」学習困難項目であるというのは、現在の日本語教育では上級の文法教育が軽視されているため、「漢語の自他」の教育の必要性自体が認識されていないという事実に基づいている。

⁷ 以下、自動詞はガ格が無情物であるものだけを考える（(3c) の性質を参照）。

2.2 本発表の問題意識

自動詞型と自他同形型は「…が～する」が適格である点が共通しているが、両者を区別することは難しい⁸。ここで、「他動詞型」でなければ「自動詞型」ないし「自他同形型」であるが、「他動詞型」か否かは、(9a) (9b) のように意味的に対応する和語で「…が～する」が不自然であるか否かで基本的には判断できる。

(9) a. ??コンビニで新しいお菓子が売った。 (自動詞)

b. *コンビニで新しいお菓子が発売した。⇒「発売する」は他動詞

c. ^{OK} コンビニで新しいお菓子が発売された。 ((9a) で意図する意味を表す文)

したがって、もし、「自動詞型」と「自他同形型」を(10)のように一体的に扱うことができれば⁹、「漢語の自他」は(12)に示すように単純化できる。

(10) a. …が～する (自動詞) <自動詞型・自他同形型>

b. …が…を～させる (他動詞)

(11) a. …が～される (*…が～する) (自動詞) <他動詞型>

b. …が…を～する (他動詞)

(12) a. (11) のような「他動詞型」の場合は、「…を～する」が使えて「…が～する」は使えない(代わりに「…が～される」が使われる)

b. それ以外の場合は、「自動詞」として「…が～する」が使えて、「他動詞」は「…を～させる」を使えばよい

(12) のような一般化ができれば、漢語の自他に関する形態的な問題点は相当程度解消され、学習負担をかなり減らすことができる。本発表では、こうした点を視野に入れた調査結果について報告する。

3. 調査結果

本節では、BCCWJ を用いた調査結果を報告する。

3.1 他動詞型の場合

2.2 節で見たように、漢語の自他は3つの型に分かれるが、これら3型は「他動詞型」かそれ以外かに2分できる。ここで「それ以外」を「非他動詞型」と称する。

はじめに、他動詞型の特徴を見るために、「…を～する」の度数順上位100位の結果を挙げる^{10,11} (紙幅の関係で「自動詞」「受身」「使役」の度数は割愛する)。

⁸ 両者の区別が難しい理由の1つは辞書にも定見が記載されていないことだが、定量的調査を行っても両者を線引きすることは必ずしも容易ではないという事実もある。例えば、張(2014)のような厳密な調査によっても、用例が何例あれば自動詞、他動詞、自他両用動詞と認めるかの基準次第で結論が変わってしまう危険性がある。

⁹ 「自他同形型」において(8c)のような「…を～させる」を他動詞と認めた場合、学習者が(8b)のような「…を～する」の実例に遭遇する可能性はある。しかし、「使役余剰」が認められる限り、「…を～させる」を使っても間違いと判断される可能性は低い。言い換えると、この場合のリスクは、「自動詞型」で「…を～する」を使った場合に間違いと判断される(こちらは確実に間違いと判断される)リスクに比べて明らかに低いと考えられる。こうした「産出のための文法」に関する方法論については庵(2016)を参照されたい。

¹⁰ 検索条件は、次の通りである。まず、BCCWJの短単位検索で、コアだけを検索対象として、「キーから前方1語：語彙素＝「を」&品詞＝「格助詞」、キーから前方2語：品詞＝名詞、キー：品詞＝名詞、キーから後方1語：語彙素＝「為る」」で暫定の順位を出した後、その上位語について、検索対象をBCCWJ全体とした上で1語ずつ前記の「キー」の部分で「語彙素＝検索語」に変更して検索を行った。

¹¹ 上位100位までの「…を～する」全体に対する累積%は53.53%である。

表 1 「…を～する」の度数表

順位	漢語	他 動 詞(…を ～する)	自他比 率 1 (%) ¹²	「す る」「さ せる」比 率 (%) ¹³	自他比 率 2 (%) ¹⁴	順位	漢語	他 動 詞(…を ～する)	自 他 比 率 1 (%)	「す る」「さ せる」比 率 (%)	自他比 率 2 (%)
1	利用	8259	0.36	0.33	2.51	51	主張	1457	0.00	0.07	0.00
2	実施	6534	0.03	0.46	13.22	52	達成	1449	0.82	1.56	12.66
3	使用	4607	0.75	0.60	7.68	53	強化	1427	0.14	0.97	13.15
4	確認	4431	0.18	1.51	13.49	54	要求	1407	3.43	0.14	28.90
5	意味	4065	2.05	0.05	0.05	55	否定	1400	0.43	0.21	8.38
6	推進	3981	0.10	0.45	3.84	56	把握	1343	1.40	0.37	1.18
7	選択	3977	0.05	0.33	4.56	57	実行	1310	0.46	2.09	12.14
8	紹介	3692	0.16	0.57	8.32	58	表現	1292	0.92	0.39	5.97
9	作成	3416	0.26	0.67	8.27	59	希望	1247	0.08	0.00	0.40
10	提供	3291	1.50	0.60	5.70	60	記載	1236	1.36	0.72	26.38
11	確保	3262	0.12	0.18	8.83	61	支配	1224	0.00	0.33	1.05
12	理解	2967	1.85	3.04	3.32	62	確立	1220	19.47	3.94	18.72
13	開始	2577	1.94	0.43	22.87	63	観察	1195	0.17	0.33	10.02
14	購入	2442	0.29	0.49	0.45	64	整備	1191	0.42	0.42	26.02
15	維持	2414	0.21	1.31	7.26	65	指摘	1188	2.22	0.17	37.34
16	設置	2360	1.42	0.25	26.53	65	防止	1188	0.00	0.00	0.67
17	設定	2309	0.52	0.30	17.30	67	卒業	1182	0.08	0.84	0.17
18	実現	2262	23.48	10.02	6.88	68	記録	1160	0.77	0.34	11.99
19	説明	2192	0.45	0.99	2.66	69	比較	1155	0.43	0.35	1.03
20	促進	2159	0.42	6.29	7.62	70	募集	1145	0.09	0.00	0.17
21	検討	2158	0.05	0.51	10.57	71	拡大	1141	31.51	8.94	9.01
22	考慮	2134	0.00	0.05	0.00	72	解決	1133	19.13	0.61	5.90
23	活用	2045	0.15	0.20	2.29	73	証明	1070	4.46	0.83	17.05
24	形成	2007	0.89	1.71	29.68	74	経験	1066	0.65	2.65	0.37
25	発見	1993	0.40	0.60	32.58	75	記入	1057	0.75	0.56	5.20
26	発揮	1986	0.45	3.26	5.92	76	想定	1010	2.13	0.59	17.89
27	用意	1933	2.03	1.38	22.80	77	評価	1007	0.40	0.20	15.09
28	決定	1883	17.16	0.42	19.29	78	尊重	1004	0.10	0.30	8.23
29	開催	1870	0.11	0.21	34.18	79	想像	989	0.80	5.81	5.27

¹² 「…が～する」の度数÷（「…が～する」の度数＋「…を～する」の度数）×100

¹³ 「…を～させる」の度数÷（「…を～させる」の度数＋「…を～する」の度数）×100

¹⁴ 「…が～される」の度数÷（「…が～される」の度数＋「…を～する」の度数）×100

30	重視	1862	0.00	0.05	0.00	80	開発	978	0.20	0.41	30.79
31	変更	1837	1.34	1.08	11.94	81	認識	972	2.61	5.54	12.90
32	導入	1823	0.00	0.05	0.00	82	拒否	962	0.21	0.41	3.12
33	展開	1800	10.22	2.12	17.88	83	整理	949	0.32	1.04	3.56
34	発表	1737	0.23	0.34	23.85	84	適用	946	0.32	1.05	40.50
35	採用	1718	0.75	0.35	17.60	85	構築	942	0.32	0.53	11.05
36	代表	1717	0.35	0.46	0.23	86	表明	934	0.00	0.43	8.07
37	取得	1670	0.48	1.47	0.42	87	改正	900	0.00	0.00	19.93
38	提出	1624	0.18	3.68	13.85	88	判断	892	1.00	0.45	2.94
39	無視	1623	0.18	0.00	2.05	89	分析	887	0.00	0.45	1.99
40	強調	1612	0.31	0.68	16.65	89	追求	887	0.56	0.22	3.06
41	指定	1564	0.32	0.32	10.83	91	通過	883	1.01	7.05	0.11
42	期待	1553	1.33	0.96	39.15	92	支持	871	0.00	0.11	0.00
43	担当	1528	0.84	2.55	0.46	93	計算	853	0.35	0.81	5.64
44	構成	1511	0.33	0.13	3.64	94	発行	844	1.17	0.59	17.58
45	獲得	1491	0.60	0.20	0.80	94	策定	844	0.35	0.24	16.68
46	入力	1489	0.27	0.27	5.82	96	保護	838	0.71	0.00	6.47
47	表示	1480	1.27	11.11	59.91	97	訪問	819	0.00	0.49	0.85
47	意識	1480	0.07	4.08	4.27	98	提示	817	1.92	1.21	11.96
49	支援	1478	0.00	0.07	0.00	99	改善	810	13.28	3.69	19.40
50	反映	1472	4.97	9.69	12.85	100	追加	804	0.00	0.12	0.00

表 1 から、「…を～する」の頻度上位 100 語の大部分は「…が～する」をほとんど取らず（「自他比率 1」が極めて低い）、「他動詞型」であることがわかる。他動詞型の場合、使役余剰は生じにくく（Cf. 定延（2000:134））、「する」「させる」比率は 0% に近くなる。

ただ、その中でも黄色でハイライトした 8 語（「自他比率 1」を小数点 1 位で四捨五入した値が 5.0 以上）は自動詞の割合が高く、「自他同形型」とも見なしうる。そのうち、「実現、反映、確立、拡大、改善」の 5 語は他の語に比べて「…を～させる」（使役）の割合が相対的に高く、「使役余剰」が許されるケースと考えてよさそうである。一方、「決定、展開、解決」の 3 語は使役の割合が低く、「自他同形型」とする必要がありそうである（言い換えると、この 3 語の場合は「…を～させる」が通常の使役の意味に解釈されやすい）。

なお、「自他比率 2」の数値が高い語がかなり見られるが、これは、「…が～される」という受身の頻度が高いことを示している。（7'）で見たように、他動詞型では「受身」が「自動詞」の代替として使われるが、表 1 で「自他比率 2」の値が高い語は「自動詞」としての用法が多いと言える。

3.2 非他動詞型の場合

続いて、「…を～させる」の度数順上位 100 位の結果を挙げる^{15,16}。

表2 「…を～させる」の度数表

順位	漢語	「を ～させ る」度数	自他比 率1 (%)	「する」 「させる」 比率(%)	自他 比率 3(%) ¹⁷	順位	漢語	「を ～させ る」度数	自他比 率1 (%)	「する」 「させる」 比率(%)	自他 比率 3(%)
1	向上	566	82.72	88.99	37.18	50	終了	75	63.08	13.76	78.63
2	完成	393	79.53	66.16	66.52	52	予感	74	1.06	44.31	1.33
3	発生	356	96.19	69.67	91.67	53	検査	71	0.00	31.84	0.00
4	成功	344	99.04	99.14	47.48	54	存続	69	83.33	85.19	46.51
5	発展	342	100.00	100.00	45.28	55	融合	68	63.33	55.28	10.53
6	低下	336	99.62	98.53	79.75	55	確認	68	0.18	1.51	58.28
7	変化	309	99.57	98.72	75.10	57	交差	67	88.10	81.71	11.84
8	増加	296	95.17	78.72	49.49	57	通過	67	13.00	7.05	66.33
8	充実	296	58.00	58.50	84.19	57	発揮	67	0.45	3.26	62.36
10	満足	283	12.24	76.69	4.07	60	感動	65	100.00	100.00	85.52
11	成立	255	99.80	98.46	88.46	60	普及	65	89.30	58.56	41.44
12	実現	252	23.48	10.02	73.36	62	意識	63	0.07	4.08	1.56
13	減少	249	96.95	87.37	82.15	63	破滅	62	42.86	93.94	4.62
14	優先	244	15.41	29.15	30.68	63	作動	62	94.59	91.18	4.62
15	連想	237	0.49	53.86	0.42	63	提出	62	0.18	3.68	62.87
16	安定	232	92.22	85.29	67.14	66	想像	61	0.80	5.81	11.59
17	納得	228	16.18	80.00	4.60	67	増幅	59	14.47	47.58	15.71
18	悪化	212	99.62	99.07	71.04	68	震撼	58	100.00	100.00	88.87
19	回転	205	80.00	87.23	36.92	68	崩壊	58	99.36	95.08	3.33
20	増大	193	92.39	80.08	75.13	70	収縮	57	100.00	100.00	31.33
21	復活	188	84.70	82.10	45.66	70	認識	57	2.61	5.54	62.50
21	移動	188	27.19	30.77	54.70	72	実感	55	1.09	10.85	8.33
23	表示	185	1.27	11.11	9.31	73	出現	54	99.89	98.18	34.94
24	集中	174	60.75	35.51	73.76	73	発進	54	64.44	77.14	94.44

¹⁵ 検索条件は、次の通りである。BCCWJ の短単位検索で、BCCWJ 全体を検索対象として、「キーから前方 1 語：語彙素＝「を」と品詞＝「格助詞」、キーから前方 2 語：品詞＝名詞、キー：品詞＝名詞、キーから後方 1 語：語彙素＝「為る」、キーから後方 2 語：語彙素＝「せる」で順位を出した後、その上位語について、1 語ずつ前記の「キー」の部分で「語彙素＝検索語」に変更して検索を行った。

¹⁶ 上位 100 位までの「…を～させる」全体に対する累積率は 55.56% である。

¹⁷ 「…が～する」の度数÷（「…が～する」の度数＋「…を～させる」の度数）×100

25	発足	167	93.84	88.36	66.73	75	再生	53	6.43	18.53	23.19
26	安心	165	25.00	75.34	9.84	76	緊張	52	96.90	92.86	80.15
27	反映	158	4.97	9.69	32.77	76	循環	52	35.48	56.52	29.73
28	回復	156	34.94	21.61	66.09	76	起動	52	30.57	9.83	70.62
29	促進	145	0.42	6.29	5.84	79	先行	50	93.52	72.46	23.08
30	上昇	136	97.56	87.18	85.45	79	発散	50	17.24	40.98	85.51
31	混乱	114	100.00	100.00	63.92	79	確立	50	19.47	3.94	84.57
32	拡大	112	31.51	8.94	82.42	82	高揚	49	78.87	76.56	53.33
33	登場	110	100.00	100.00	7.56	82	逆転	49	82.39	61.25	74.74
34	爆発	109	100.00	100.00	68.68	84	沸騰	48	100.00	100.00	79.83
35	発達	108	99.64	98.18	83.66	84	浸透	48	100.00	100.00	54.29
36	理解	93	1.85	3.04	37.58	84	結合	48	62.91	30.00	76.24
37	成長	92	100.00	100.00	61.34	87	分散	47	47.22	45.19	52.04
38	想起	91	2.52	43.96	3.19	88	麻痺	46	100.00	100.00	70.32
39	一変	90	88.03	84.11	58.14	89	興奮	45	0.00	88.24	0.00
40	紅潮	84	100.00	100.00	27.59	90	一致	44	99.46	93.62	0.00
41	乾燥	83	87.64	79.05	65.27	90	独立	44	68.52	56.41	50.56
42	両立	82	40.98	69.49	49.38	90	習得	44	0.00	12.68	62.71
42	徹底	82	18.69	19.07	23.36	90	軽減	44	9.22	9.03	92.67
44	定着	80	97.87	90.91	82.14	94	屈伏	43	50.00	97.73	2.27
45	誕生	78	99.81	98.73	56.42	94	壊滅	43	70.91	72.88	47.56
45	持続	78	61.01	47.85	63.03	96	参加	42	100.00	100.00	79.21
45	加速	78	46.54	40.21	87.09	96	継続	42	18.54	5.64	88.49
48	上下	77	56.00	70.00	70.72	98	密着	41	100.00	100.00	0.00
48	停止	77	34.64	17.99	35.29	98	失望	41	0.00	100.00	93.40
50	消滅	75	97.87	92.59	91.46	98	進行	41	96.83	68.33	34.92

表2で黄色でハイライトした語は「…が～する」が使えて「…を～する」の例がほとんどないため「自動詞型」と考えられるので、「他動詞」として「…を～させる」が使える。

これ以外の語は「自他同形型」と考えることもできるが、表1とは異なり、「する」「させる」比率は概ね高い。そのため、表1と同じ基準（小数点第1位で四捨五入した値が4.0以下のものは「…を～させる」を取らない）で考えると、「他動詞」として「…を～させる」を使わない方がよいと考えられるのは「理解、確認、発揮」の3語となり、それ以外の語では、「他動詞」として「を～させる」を用いても誤りにならないと考えてよいと結論する。

なお、「非他動詞型」の場合、「…を～させる」が「他動詞」として使われると考えるので、表2の各語において「自動詞用法」が多いのか「他動詞用法」が多いのかを知るためには、「…が～する」と「…を～させる」の割合を表す「自他比率3」の数値を見る必要がある。これを見ると、水色でハイライトした21語以外は自動詞用法が多いことがわかる。これは、「自動詞型」と「自他同形型」を「非他動詞型」として一括したことの有効性を示し

ていると考えられる。

4. まとめ

本発表では、漢語の自他について、漢語の自他を 1) 自動詞型、2) 他動詞型、3) 自他同形型に分け、さらに、A) 他動詞型と B) 非他動詞型と捉えた上で、BCCWJ を用いて A、B 両タイプについて頻度上位 100 語について調査を行った。その結果、次の結論が得られた。

- (13) a. 他動詞型の場合、「自動詞」として「…が～する」は使えず、それに加えて「他動詞」として「…を～させる」も使わない
- b. 非他動詞型の場合、「自動詞」として「…が～する」は使えるが、「他動詞」は「…を～させる」を使えばよい
- c. ただし、今回の調査範囲では「決定、展開、解決、理解、確認、発揮」の 6 語については「他動詞」として「…を～する」を使った方がよい
- d. 漢語の自他では「受身」「使役」も含めて考える必要があり、その上で、各語について「自動詞用法」が優勢か「他動詞用法」が優勢かを考える必要がある

本発表の内容については、さらに精査する必要があるが、そうした精査を経た上で、こうした内容を日本語学習者向けの辞書に登録していく必要がある。

謝 辞

本研究は科研費基盤 (A) 「やさしい日本語の理念に基づく移民時代の持続可能な多文化社会実現のための総合的研究」の研究成果の一部である。なお、本発表のデータ作成にあたり、一橋大学言語社会研究科博士課程謝正科さんと趙静さんの協力を得た。記して心より感謝いたします。

文 献

- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第 2 版)』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2016) 「産出のための文法」から見た「は」と「が」 庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 庵功雄 (2024a) 「産出のための文法から見た日本語のボイス表現」『言語文化』61、一橋大学
- 庵功雄 (2024b) 「アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習—漢語サ変動詞を中心に—」『日本語文法学会第 25 回大会予稿集』
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・宮部真由美 (2013) 「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告：「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4、一橋大学
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 中川正之 (2005) 『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
- 劉倩卿 (2021) 「中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のための総合的研究」2021 年度一橋大学言語社会研究科博士論文

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>